

## 初期ウォートンのホーソンの側面

島津 厚久

一般の文学史では、イーディス・ウォートン（一八六二—一九三七）は、ヘンリー・ジェイムズの後継者ということになっているが、初期の作品の中には、作品中の人物像、思想、技法などの点でホーソンのともいえるものがある。

たとえば、『イーサン・フロウム』（一九一一年）と『ブライズデイル・ロマンス』（一八五二年）の間にはさまざまな対応関係を見い出せる。

どちらの作品も、それぞれマティ・イーサン・ゼノビア、プリシラ・ホリングズワース・ゼノビアの三角関係が中心となっているが、マティとプリシラはその原初的無垢性、イーサンとホリングズワースは自己中心性、そして二人のゼノビアは超人間的、魔女的な力強さという点で通じ合うものである。

そのみならず、両作品の冒頭におかれた「序文」を比較すれば、ウォートンはホーソン流のロマンスを志向していたと考えられるのである。

この三角関係はいずれも破綻し、マティとイーサンは自殺に失敗して不具者となり、ゼノビアに組み敷かれて敗残者としての人生を送らねばならず、プリシラとホリングズワースも恨みの言葉を残して自殺したゼノビアの呪縛から逃れられない。

さらに、このような愛欲の悲劇が、ニューイングランドを舞台にしていることに注目すべきであろう。ニューイングランドは、

アメリカ大陸に移住したピューリタン達が神制政治を行なった、宗教色に覆われた場所であったのであり、「福音にことのほか豊かにあずかっている光榮のゆえに、他の民より高くあげられている」（ピーター・バルクリー。大下尚一訳。）国というイメージで捉えられていた。『イーサン・フロウム』と『ブライズデイル・ロマンス』の悲劇は、このような樂觀的かつバラ色のニューイングランド観に対するアンチテーゼとなっているのである。加えて、ウォートンとホーソン二人の伝記的な事情をも考慮するならば、かたや「お上品な伝統」によって病的なまでに抑圧された性に苦しみ、他方魔女符りや近親相姦に汚れた祖先をもっていたことを強く意識していたなど、いずれもピューリタニズムの暗黒面に関係していたわけであり、二人は作品として表に現われた部分のみならず、人間存在の根底的な部分でも親近性をもっていたといえるのではないだろうか。

『イーサン・フロウム』については、当初から、ニューヨーカーのウォートンにニューイングランドの田舎の生活はわからないという批判があった。それに応えて彼女は六年後に再びニューイングランドの山村を舞台にした小説『夏』を出す、そこにみられるニューイングランド観は頑ななまでに『イーサン・フロウム』のそれと変わらない。ここでのニューイングランドは、ノース・ドーマーの村はすれにある山として顕著に立ちあらわれる。ここは酒と性的乱交に明け暮れるごろつきたちの溜り場となっている。この作品のクライマックスともいえる葬式の場面（埋葬されるのも淫乱な生活の後に死んだ女性である）では、牧師の口から発せられる「We brought nothing into this world…」とか「For man walketh in a vain shadow…」という讚美歌の格調高い

英語が、「ひんがしたちの」、「I'll lick any feller…」などの「Sit down, damn you!」といった野卑な英語にしばしばかきけされてしまうのである。ニューイングランドについては、「多くの人がとが求めてくる丘の上の町」というイメージがあるが、ウォートン描くところの「丘の上の町」はそういうバラ色のイメージとは正反対のものである。

ホーソンの文学作品においても、誠実な宗教的態度と対極のものを示す場としての山や森のイメージは見い出せる。たとえば、「イーサン・ブランド」(一八五〇年)の主人公イーサンは、「許されざる罪」を探しに行き、その過程でエスターという少女を破滅させる。実は、「許されざる罪」は、他人の中にそれを見つけて出そうとするイーサン自身の自己中心的な心の中にあつたのである。彼は「人類愛」や「神への愛」から絶ち切られて孤立し、山中で自殺して果てる。ホーソンの「丘の上の町」も、人間の暗黒面を開示する場として機能しているのである。

ホーソンとウォートンに共通する鏡のイメージについても考へたい。

ホーソンの「ファンシーの覗き箱」(一八三七年)には、鈴木重吉氏の言う「真実を映す鏡」が登場する。「尊敬すべき紳士で長い間道徳的完成の典型とみなされてきた」スミス氏が覗いた拡大鏡には、若い頃の自分が幼な友達少女を踏みつけにしている

図、親友を殺している図、飢えた子供から服を剥ぎ取っている図が次々と映し出されるのである。

ビュリタンの人格高潔の人の裏側に邪惡なものが存在していることを示そうとする精神、さらにそれを映し出すものとしての鏡イメージの使用はウォートンにもみられる。その典型例が「眼」(一九一〇年)である。これは、カルウィン (Culwin。ビュリタニズムの始祖カルヴァン—Calvin—を連想させる) という頭脳明晰で真面目な牧師が、自分が善行を積んだと自認した日の夜に限って、寝床の鏡に映った恐ろしい形相をした眼に睨みつけられるというもので、鏡に映ったこの眼は、「善行」の背後にあるエゴティスティックな動機を象徴しているわけである。この作品ほどウォートンのホーソンの側面を如実に反映しているものも珍しい。

従来リアリズム文学に分類されてきたウォートンにも、このように、人物造型、思想、技法などの点でホーソンとの親近性を指摘できるのであるが、しかし、時代が進むにつれ、『無垢の時代』(一九二〇年)などジェイムズ流の細致かつ皮肉のきいた風俗小説へと向かっていき、さらには、フィッツジェラルドなど新しい世代の文学に対しても飽くなき興味を持ち続けた。

ウォートンは、社会や文学の主流に常に敏感に反応し、そのエッセンスを貪欲に吸収した作家といえる。